石巻アート
台湾壁画プロジェクト

春の約束

2012

台湾壁画隊
東北プロジェクト

主催：　新台湾壁画隊
後援：　石巻市
協力：　石巻市国際交流協会　石巻市文化協会
（株）街づくりまんぼう　　ISHINOMAKI2.0
コンシェルジュ石巻　アトリエ・コパン
南華園　がま耳鼻咽喉科　（株）本家秋田屋
日和アートセンター
神戸文化支援基金　神戸被災地市民交流会
台湾芸術発展協会　新故郷文教基金会
白屋　高苑科技大学芸文中心
新浜碼頭芸術学会　南華大学建築與景観学系
台南芸術大学建築芸術研究所　嘉南薬理科技大学
服務学習中心　螺陽文教基金会
有影文化事業有限公司　普京／尼可公司

活動報告書

大槌アート日台共同プロジェクト実行委員会
（カリタスジャパン大槌ベース
台湾・新故郷文教基金会　台湾・新台湾壁画隊
神戸・被災地市民交流会ほか）

希望の樹

大槌アート
日台共同プロジェクト

台湾壁画隊
東北プロジェクト
2012

台湾のアート集団台湾壁画隊の東北プロジェクトは、かねて台湾の被災地と交流を進めてきた神戸の被災地市民交流会が橋渡し役として、石巻と大槌の二か所で実施することが出来ました。

石巻では、台湾・高雄市の橋仔頭芸術村（白屋）に拠点を置いて活動してきた「新台湾壁画隊」が、来年春行なう「白屋」プロジェクトのプレイベントとして、市街地の建物壁面に壁画制作などを実施しました。

大槌では、台湾・埔里に拠点を置く新故郷文教基金会を中心にしたアート・まちづくりメンバーで、「台湾壁画隊」を結成して被災地のボランティアベースの壁面に壁画を制作しました。

石巻アート台湾壁画プロジェクト 3

台湾壁画隊行程 3

活動記録 4

完成作品 8

トークセッション「被災地とアート」 14

参加者名簿 21

大槌アート台湾壁画プロジェクト 22

台湾壁画隊行程 22

活動記録 23

完成作品 31

参加者名簿 33

参考 35

橋仔頭芸術村と新台湾壁画隊 35

ペーパードームと新故郷文教基金会

石巻アート台湾壁画プロジェクト

台湾壁画隊行程

8/9（木）	14:30　台湾壁画隊成田空港着
8/10（金）	15:00　台湾壁画隊石巻着 16:00　石巻市長（副市長対応）表敬訪問 16:30　工作会議（場所：市役所）（メンバー紹介、実施計画内容説明） 17:30　活動現場視察・実施内容協議
8/11（土）	9:00　石巻視察（午前　市内）（午後　女川　雄勝） 18:00　交流会（場所：南華園）
8/12 (日)	作業（第 1 日） 18:00　トークセッション「被災地とアート」（場所：復興マルシェ）
8/13(月)	作業（第 2 日）
8/14 (火)	午前　作業終了、NHK 取材 午後　自由活動 17:30　大槌チーム到着　石巻壁画視察 18:00　報告・祝賀会　（場所：復興マルシェ）
8/15(水)	新潟へ向け出発

活動記録

第１日（8 月 10 日）

幾つかの事前準備

朝９時過ぎから、街づくりまんぼう事務所で打合せを始める（西條、垂水）。まず、脚立の調達のためホームセンターへ。大小各３台購入。その後、市役所の担当課（企画部市民協働推進課）を訪れ、佐藤課長らと打合せを行う。

続いて壁画制作のコラボレートに尽力していただく、アトリエ・コパンの新妻夫妻を訪ね、意見交換する。壁画制作に高校生が参加する予定だが、アーティストの手伝いをするのでなく、描くスペースを分割してそれぞれが制作しながらコラボレートする方式を提案された。また、テーマは希望の木が良いのではないかとの意見も。

台湾チーム到着、石巻市表敬訪問

台湾チーム一行が乗ったバスがお盆の渋滞に巻き込まれないか心配したが、３時過ぎには無事ホテルに到着したとの連絡が入る。約束通り３時４５分には市役所へ。石巻から久我国際交流協会会長、山田文化協会事務局長、神戸から被災地市民交流会の石井さんらも。

定刻４時から北村副市長の出迎えを受けて表敬訪問が始まった。西條さんが切り出しの挨拶の後、陳正哲団長が台湾チームを代表してあいさつする。続いて北村副市長の歓迎あいさつを受けて、台湾チームから記念品が副市長に手渡された。

李俊賢アーティスト代表から手渡される白屋模型

北村副市長退席後、実施計画の打ち合わせに入る。改めてメンバー紹介や概略の計画説明を行った後、詳細は現地で協議しようということで、市役所を後にした。

制作現地で協議

街づくりまんぼうの事務所ビル壁面の前へ到着、壁面の情況や高さなどを確認する。新妻氏が希望するコラボ方式を台湾側に提案する。台湾側も了承し、具体的な絵の内容や分担スペースの決定は、明後日来る高校生たちと協議して決めることになった。

一方、南華園とがま耳鼻咽喉科の周辺へは、積木都市やチョーク絵の活動する部隊が到着。アスファルト路面の広さ、壁面の情況や高さなどを確認する。ここでは台湾出身の南華園の中山敏江さんがきめ細かな情報を提供する。

とりあえず、今日はこれまで、ゆっくり休んでください。

第２日（8 月 11 日）

被災地視察

台湾の皆さんに石巻の被災状況など現状を知ってもらうこと、これはこのプロジェクトを進めるために欠かせない。９時にホテルのロビーに集合した彼らはバスに乗り込み、菊田貞吾氏の案内、石井氏の添乗でまず石巻市街地の情況を見るべく出発した。

菊田氏の流ちょうかつおもしろい解説付きでの視察。コースはまず日和山に上がって上からの視察。続いて製紙工場群から門脇小学校へ。以後石巻漁港付近を経て市内視察を終了した。

昼は復興マルシェで昼食休憩をとった。すでに大槌に入っていた台湾のテレビ「華視」の番組製作クルーが石巻に到着、ここで合流した。そして午後の視察女川方面へと出発した。

日和山から被災地を見る

門脇小学校

女川方面視察へ

午後は女川町へ。ここも病院敷地へ上がり上からの視察。まだ転倒した建物が残っている。津波の力を物語っている。それから総合運動公園にある東北でも１，２の３階建仮設住宅？を見る。建築家坂茂の提案・設計したもの。これはちょっとやりすぎ？　台湾の人々はどのように見たのか。

女川　病院から被災地を見る

３階建て仮設住宅

心配な雨模様

ところで作業が始まる翌日から２日間の天気が心配である。この両日は日本全国低気圧が覆う雨模様で、石巻地方も降雨が予想される。壁画やチョーク絵は不可能になることも大いにありうる。台湾の意見も聞いたうえで、屋内で制作できるよう木製ベニヤを購入しておくことにした。ホームセンターを訪ね、厚さ９ミリのベニヤ板を 15 枚購入、降雨時に備えた。

南華園で交流会

台湾メンバーと石巻及び神戸の関係者で歓迎交流会を行う。場所は今回の協力者である台湾出身の中山敏江さん家族で経営する中華料理店南華園である。あまり広くない店内に 40 人近くが集う。宴もたけなわ、終わり頃になって台湾からの石巻及び神戸の関係者にプレゼント。最後に中山敏江さん夫妻にも。

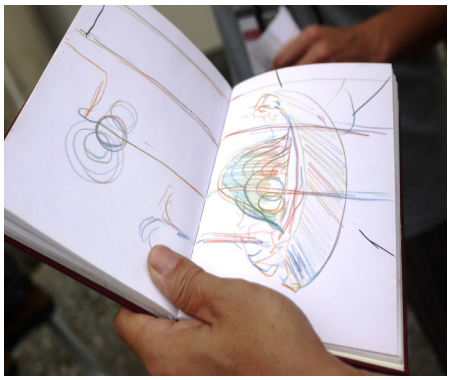
さあ、明日からは仕事ですよ。

陳正哲団長の音頭で乾杯

第３日（8 月 12 日）

壁画制作開始

今日からいよいよ作業がはじまる。心配された天気も曇り空。集合時間の９時には街づくりまんぼうの事務所のビル壁面の前に、ここを担当する台湾メンバー（壁画制作班）、アトリエ・コパンの高校生の生徒さん二人が到着。さらに新妻先生ご夫妻も来られた。



台湾アーティストの下書き

早速、壁画コラボ方式の話合いが始まる。台湾の描こうとするテーマは「バナナの木」で、その下絵は極めて大雑把なもの。これを中央部あたり上方にかけて描きましょう。高校生の二人は、脚立を使う必要のない左右の背のとどく位置に、一人一人が自由に描いていくことに決まった。

「さあ、始めましょう」

壁画を描く高校生たち

積木都市とチョーク絵も開始　―南華園周辺

もう一つの活動現場（南華園、がま耳鼻咽喉科）でも作業準備が始まる。南華園のテーブルが１セット持ち出され、チラシや台湾の廟のお守り（馬祖という海の神様）が並べられ、見学や参加する市民に対応するコーナーがしつらえられる。積木が準備され、早速ここでも壁画がスタートする。

積木都市のスタートの様子

今使われていないがま耳鼻咽喉科には、通路と駐車場がある。今日は通路を使い、明日は駐車場を使おうということとなり、早速チョーク絵の作業も始まった。

立ちどまる市民や観光客

午前中でかなりの作業が進んだ。街づくりまんぼうの壁面ではバナナの船体の上に、バナナの木が立ち、山のような物も積んでいる。いわば、石巻へ向かう台湾「バナナボート」のようだ。両横では高校生が花や樹木の絵を描くのに余念がない。お盆がえりの家族連れや観光客など普段より人通りが多いが、一様に立ち止まり、珍しそうに眺める。通訳のスタッフが、これらの人達にチラシを渡し、台湾の廟のお守りをプレゼントしながら、この活動を説明する。通りかかりの車もスピードを緩め、窓越しに眺める。

夕方にはほぼ完成像が見えてきた。明日参加できない高校生たちは持ち分を描き終えた。全く違和感なく台湾の「バナナボート」に馴染んでいる。コラボレーションは上手くいったようだ。今日一日、高校生のサポートでお付き合いいただいた新妻ご夫妻やお母さんたちと共に、壁画を前で記念撮影を行った。

一方、積木都市の壁画作業とチョーク絵も順調に進んできた。ここの壁画は最初に全体構想があるというより、３人の若手のアーティストが、当意即妙に描き繋い

でいくといった形。赤い線で描かれた台湾の廟が雲の間に浮かんでいる。右手には仮面ライダーも。壁にある煤汚れた排気口も絵に取り入れられる。掛けられていた「南華園」の看板も外されて、絵の中に取り込まれる。

こちらも里帰りの市民など、立ち止まって話しかける人が多い。次々と積木遊びやチョーク絵に参加する子供たちもある。

一日の作業を終え、記念撮影

参加の子どもに話しかける林純用さん

積木都市の壁画も進む

トークセッション「被災地とアート」

ISHINOMAKI 2.0 の松村豪太さんの発案によって、6時からマルシェフードコートで、トークセッション「被災地とアート」が開催された。夕食を済ませて、台湾スタッフ、石巻スタッフ、それに神戸のメンバーなどが、茶菓子が用意された会場に集まってくる。会場正面に、台湾から３人の若手メンバー、日和アートセンターのアートプログラムコーディネーター、及び神戸の被災地市民交流会の５人がパネラーとして並ぶ。コーディネーターの松村氏の進行で始まったトークセッションは、被災地とアートにかかわって、アーティストと被災者の思いのすれ違いなど、核心を突いたトークが展開された。台湾メンバーや石巻などでアートを軸に活動してきたパネラーや参加者から、体験にもとづいた発言が続き、予定時間を越える興味深いセッションとなった。

林純用さんと松村さん（右）

第４日（8月13日）

作業は続く

今日の天気予報はやはり３時から雨。しかし、昨日効率が上がったのでさほど焦ることもない。着々とそれぞれの作業を進めていく。

この２日間、様々な市民の方が立ち寄ってくださった。里帰りして変わり果てた街を見て回っているという家族連れ、以前すし屋で台湾壁画隊準備メンバー出会ったことのあるという商店主、ボランティアに来たが被害の大きさに自分の役割がわからなくなったという若者、台湾との交流を教育に生かせないかと模索中の学校の教師夫妻、木版画を制作している方、絵が趣味で描きためた色紙のほとんどが流された方などが、立ち寄り、言葉を交わし、あるいは、参加してくださった。少しずつ交流が広がるのを実感する。石巻門脇小学校で２本のドキュメンタリー映画を制作した青池監督、被災地市民交流会の小林さんもこの日の午後に駆け付けた。

元歌手タレントに取材される郭育廷さん

いよいよ完成へ

午後３時になっても、雨の降る様子はない。壁画もそろそろ完成というところで、街づくりまんぼう事務所の壁画の前では台湾のテレビ番組取材が始まっている。ここを担当した李俊賢、李俊陽、　　が一人一人壁画の前に立って、元歌手のタレントからインタビューを受ける。李俊賢さんは、新台湾壁画隊アーティストのリーダーである。

夕方、ほぼ完成というところで、壁画の前で記念撮影し、今日の作業を終えた。どうやら３時の雨は夜半にまで延びたようだ。

ほぼ完成した壁画の前で記念撮影

第５日（８月１日）

NHK 取材 「ジョホー、シンタイワン、ピィ、ウェイトェイ」

今日は最終の仕上げの様子を NHK がテレビ取材をしたいということで、午前 10 時、街づくりまんぼうの壁画前に集まった。神戸から（公財）神戸文化支援基金の島田誠さんも駆けつける。昨夜半から降った激しい雨もやんでいる。幾つかの描き足しをしたり、サインを入れたりしている様子を撮影した。

その後、NHK のリクエストで「てれまさむね」というローカル報道特集でも流したいとのことで、壁画前で一斉コールをすることになった。日本のメンバーがまず台湾語で「ジョホー、シンタイワン、ピィ、ウェイトェイ（すごいぞ、台湾壁画隊）」と叫ぶ、続いて台湾のメンバーは、日本語で「見てください！てれまさむね」とこたえる。事前に紙に書いて何度も台詞の練習の後、さあ本番。テイク５くらいで OK がでた。「お疲れさんでした。」

NHK 取材風景

大槌グループも到着、合流する

岩手県大槌の被災地で、ボランティアベースの４階建てのビルに壁画を描いていた台湾グループは、この日の朝大槌を出発、石巻へ向かっていた。途中、これまで縁のあった被災地数か所に立ち寄り、カンバスに書いた絵をプレゼントしながら、夕方４時に石巻に到着する計画だ。予定より少しずつ遅れるが、添乗している被災地市民交流会の福留さんと緊密に連絡を取る。５時 35 分ころやっとバスが到着した。そのまま石巻の活動場所を一巡した後、６時から予定されている報告・祝賀会の会場へとぴったり到着した。

盛り上がった報告・祝賀会

ほぼ予定の時間の６時過ぎ、最後の行事である報告・祝賀会が始まった。北村副市長がお礼のあいさつ、これに対し台湾の陳団長からもお礼のあいさつを返す。そして、台湾の蒋コーディネーターの音頭で乾杯、会は始まった。その時、タイミングよく午前中収録した「一斉コール」のシーンがテレビで流れる時間になった。会場の大型テレビに参加者の目が釘付けになる中、「ジョホー、シンタイワン、ピィ、ウェイ　トェイ」「見てください！てれまさむね」が映しだされる。会場からどっと歓声が上がる。

大槌グループから石巻市へ贈呈

挨拶するに新妻アトリエ・コパン代表

その後、大槌、石巻の活動報告が始まる。どちらも制限時間５分。解説なしで、バックグラウンドミュージック付きのスライドショウが始まる。いずれもなかなかの出来栄え。映画監督の青池さんも、「こりゃ、いいわ」とつぶやいたほど、多くの事が伝わってくる。また、大槌のメンバーから、石巻市にカンバスに描いた絵が贈呈された。

宴もたけなわの頃、突然、台湾メンバー 20 人ほどが横一列、互いに手を交差して組みながら、外から会場へと踊り込んでくる。台湾原住民族の踊りだ。その後、前方で（疲れて？）椅子に座っている高齢者に、酔った真似をしながら近づいてきた若者が、跪づいて杯を掲げる

手を組んで原住民式ダンス

杯を掲げられる山田さん

パフォーマンスがしばし続いた。尊敬の表現らしいが…

最後は、菊田さんが音頭をとって、日本式サンサンナナ拍子で締める。８時過ぎの閉会だった。多賀城のホテルまで戻らなければならない台湾勢は総勢 43 名、石巻残留組に見送られ大型バスに乗り込んで石巻を後にする。

来年の「春の約束」で、再見！

完成作品

壁画１　街づくりまんぼう事務所（石巻市中央 2-5-7）

趣旨・メッセージ

石巻との交流を久しく期待してきた台湾の芸術家は、石巻に初めて来て、知ったばかりの当地，美術教育者新妻健悦先生の２名の学生（高橋梨紗さん･神田瑞季さん）と､皆で壁画の草案を討論した。２名の可愛い女性は台湾アーティストたちが表現したい壁画の内容を理解し、色とりどりの温かい色調で、蔓が伸び豊かに実る感覚を表現したいと希望した。これは石巻市のこれからの復興の道筋に対する新しい世代の期待であり、多くの力や支援と結びついて、共に新しい石巻を創造することでもある。

発起人の李俊賢は石巻壁画創作のコンセプトとして、台湾の南島文化を最も代表する原生果物バナナをモチーフに、「バナナ船」を全体に描写し、新台湾壁画隊が太平洋の白波を航海し、「祈福」を載せて東北へ至る様を表現したいと考えた。

李俊賢はいつも使っているキーワード [頌] と [讃] は捨て、震災後の石巻の寂寥とした街並みを目の前にして、長年日本と交流のある陳正哲教授と討論した結果、[立] -「立ち上ろうの意」と書くことに決めた。

日本の絵具は温和で明るく、日本の民族性を表すようだ。私たちチームの触感スピリットで、温かい支援の気持ちとして、一緒に「立ち上ろう」を伝えたい。

発起人の李俊陽は、石巻、女川を訪れ、自然の力の大きさ、特に女川では湾口の地形が狭まっているため津波の破壊力が膨大になったことに大きな印象を受けた。そこで､バナナ船に載せた「祈福」のもとで、美しい山河となることを願って、波風穏やかな仙境を描き表す。

これまで「仙」を主題に創作してきた李俊陽は、お経の祈りで愛の力を示し、石巻市民の復興の道が、仙人仙境にあるがごとく、和楽平安であらんことを願う。

新世代のアーティスト郭育廷は、二人の先輩の画面に応じながら、石巻駅から萬画館に繋がる「マン

ガロード」、あふれている子供むけの漫画感覚に、機械仕掛けの猿、テントウムシ、蝶を描き入れ、画面全体に元気よく跳ねまわらせる。

最後に李俊陽は、新台湾壁画隊の石巻市 2013 年春の約束を、「白屋」をかついで空を飛び渡る小さな仙人たちで、必ずもう一度来て、石巻市民と共に夢を果たすことを示した。

作者紹介

【李俊賢 1957-】
1988 ニューヨーク市立大学芸術修士
現在 高苑科技大学建築系副教授

前任《芸術界》雑誌編集主幹、ニューヨーク《中報》/Centre Daily News 業務部美術編集、《南方芸術》雑誌芸術編集長、《橋仔頭糖廠芸術村》駐村芸術家、高雄市立美術館館長
台北、台中、高雄美術館、国立歴史博物館、各地文化センター、画廊開催個展及びグループ展，パリ、北京、ニューヨーク等のグループ展参加多数。

【李俊陽 1967-】
金枝演社 クリエイティブ主管

2012 台新芸術賞入選視覚芸術部門決選
2003 アメリカ・サンフランシスコ・ヘッドランド芸術センター駐村芸術家
2002 アジア文化協会視覚芸術部門プレゼンター
2001 台中 20 号倉庫第 2 回駐在アーティスト
1998 台中 20 号倉庫第 2 回駐在アーティスト
1998 桃園大溪大道芸術館第 2 回駐館アーティスト
台北、台中、高雄、各地画廊開催個展及グループ展多数，アメリカ・サンフランシスコ・ヘッドランド芸術センター駐村成果展

【郭育廷 1986-】
沈欽銘先生に師事，本科系の出身でないが，幼い時から絵画が好きで熱心に取り組み、クレヨン、水彩、油彩を試み、作品の多くは現存あるいはすでに解体された古い建物に描いたものである。
新台湾壁画隊に加入、共同創作に加わり、創作の先輩たちと交流・協働する中で多くの新しい考え方を獲得、現在は、変形した建物から敷衍した《雑湊集成建物》、線構成の思考にもとづいた《Mind Catcher》の二つのシリーズに取り組んでいる。

【高橋梨紗 1995-】
美術教育者・新妻健悦に師事，石巻在住，現在，仙台第一高等学校 3 年在学，仙台市高校展で優秀賞（2012 年），河北美術展で入選（2012 年）。

【神田瑞季 1995-】
美術教育者・新妻健悦に師事，女川町在住，現在，県立宮城野高校 2 年在学，震災で祖父，親友，を亡くす。女川町復興支援の「絵はがき」に採用される（2011 年）。ガレキ処理場に壁画「希望の道」を描く（2012 年）。

壁画２　南華園周辺（石巻市中央 2-1-2）

趣旨・メッセージ

南華園の創作現場のアーティストは林書楷、焦聖偉、呂沐⊠が主体で、チョーク絵組の林純用、黄志偉と見学団員のメンバーが加わる。中山敏江さんにお世話をいただいて、交流計画は順調にかつ楽しく進めることができた。

アーティスト林書楷は、台湾の台南から消失しようとする台湾の伝統産業の木製模型を持ってきて、参加した市民に積木遊びをしてもらう方式をおこなった。交流を深め、住民の都市のイメージを観察することと、さらに重要なことは住民が参加して土地に親しんでもらうことだ。
壁画は、創作者がいつも使う構図方式で、南島の風情を持つ「島民」、「島」や「都市」といった画像や符号で構成した一つのトーテムで、空を懸け漂う感覚で、石巻市民と共同創作した幸せな都市をゆったり楽しむ。

　アーティスト呂沐⊠と焦聖偉は、壁面を提供した南華園中華料理店のために「南華園駐車場」の字句を新たに描き直し、元の作者田中英夫さん（南華園向かいの自転車店店主）の許可もいただいた。
　またここには、311 の津波時の水没高さを記念表示し、過去と決別して希望あふれる未来を迎えることを象徴する。
　台湾に満ちた助け合いの心を、色彩のエネルギーに換えて、美しい虹を架け、希望の樹を植えて、来年の春の約束を期待する。中山さんのお世話に感謝し、アーティストが抱いた思いを壁面に描き、善意の交流が希望と愛の出発点であることを表した。

創作過程で、見学団やチョーク絵組のアーティスト林純用、黄志偉も随時創作に参加した。
　アーティストの幼い時の偶像―仮面ライダーを書き加える。
　「天公」説「大丈夫」は台湾語と日本語をあわせたもの。平安で順調を表す。

作者紹介

【呂沐⊠ 1971-】
国立台南芸術大学造形芸術研究所修士，現在は、樹徳科技大学建築環境系で教えている。
1998 年からこれまで、台北、台中、高雄、各地畫廊開催個展多数、台湾、イタリア、ルーマニア等の美術館、文化センター、画廊などでグループ展
2005 Gallery MMG. Budapest Hungary 駐在芸術家 / ハンガリー 9~10 月
2006 Kio-A-Thau Sugar Refinery, Kaohsiung, Taiwan 駐在芸術家
台湾高雄橋仔頭糖廠芸術村 5~8 月
2006 Free Camp Ⅱ Harghita Cultural Center, Romania 国際青年創作セミナー駐在芸術家,
Harghita 文化センター，ルーマニア 10 月
2007 Gate Gallery , China , Beijing 中国北京 紅門画駐在芸術家 2007'2~2007'5
2009 48 時間芸術認証駐在芸術家、台湾橋仔頭白屋

【焦聖偉 1979-】
国立台南芸術大学造形芸術研究所　卒業
2001 年からこれまで，台北及台中で個展多数、台湾画廊、文創センターのグループ展参加多数。
2004“…loading…continue…” 財団法人国家文芸基金会展覧 91 期補助獲得
2005　台中 20 号倉庫芸術村 第 6 回駐村芸術家選抜
2008　ドイツ科隆家具展新人設計師區入選
2009　高雄国際コンテナ芸術節 入選

【林書楷 1983-】
国立台北芸術大学美術学系修士課程卒業

2012 年　新台湾壁画隊博覧会 – 新世代新世代画像（駁二芸術特区）高雄
2012 年　強占青春三人グループ展（Design Festa Gallery）東京
2012 年　新台湾壁画隊 – 台湾之心移地創作計画（紙教堂）南投
2011 年 ART TAIPEI 台北国際芸術博覧会（台北世貿一館）台北
2011 年 Asia Top Gallery hotel Art Fair（香港文華東方酒店）香港
2011 年　芸術北京 . 当代芸術博覧会（北京 • 全国農業展館新館）北京

チョーク絵　がま耳鼻咽喉科周辺（石巻市中央 2-1-4）

趣旨・メッセージ

「チョーク絵・微笑大地」のアーティスト林純用、黄志偉は、エコ・チョーク、木炭など臨時性の画材で住民の参加を要請しながら落書きをする。

保存の効かないチョークの特性を生かして、住民とアーティストの隔たりを打ち破り、誰もが大胆に落書きする。

作品の価値は作品が存在する時間の長短ではなく、参加する中での共同記憶とその継続である。

創作過程の中で、アーティストの黄志偉と林純用は、見学団らと陽光のもとはばかることなく描いていく。皆が落書きを始めると、道行く人達も興味がでてきて絵をかくのに参加し、チョークを持っ

て子どものように、愉快な笑顔が広がっていく。次第にアーティストも自由に描ける空間を市民に譲っていき、今回の交流のテーマの描写に着手した。「仮面ライダー」、「新台湾壁画隊」、「春の約束」…など。

もともと計画は、創作のあとは、チョークは大雨で流れ去り、大地の色に帰る予定であった。果たせるかな、8 月 13 日夜の大雨によって、2 日間の創作の痕跡は跡かたもなく消え去った。創作現場に返ってみると、すでに作品は見ることができなかったが、協働し交流した楽しい経験は、それぞれの参加者の胸に記されている。

作者紹介

【林純用　1967-】
南華大学美学・芸術管理研究所修士卒業業
前任職　広東美術館、嘉義県政府文化局、南華大学通識センター芸術学程兼任講師
2010　高雄県小林村駐村芸術家；嘉義県水上郷頂塗溝社區駐村芸術家
2011　小林村五里埔永久屋創意門牌規劃執行・電信設備機室外壁壁画；新台湾壁画隊参加
2012　嘉義新港香芸文化園区壁画創作；新台湾壁画隊参加

【黄志偉　1971-】
ベルギー国立ラ・カンブル高等視覚芸術学院 – 彫塑 – 修士
現任 崑山科技大学視覚伝達設計系助理教授、新浜碼頭芸術学会理事長
これまで、台北、台中、高雄、各地画廊開催個展、グループ展多数；高雄市立美術館隔月刊「芸術認証」芸術評論多数発表
2007　2007 高雄賞優選
2005　財団法人国家文化芸術基金會　2005-2 期美術部門創作補助
1999　ベルギー皇家専門芸術家協会賞

トークセッション

「被災地とアート」

2012 年 8 月 12 日　P2012 年 8 月 12 日　PM 6：00　石巻復興マルシェ

挨拶
　西條允敏　石巻市民文化協会
パネラー
　林純用　　アーティスト・台湾
　呂沐⊠　　アーティスト・台湾
　巫宛萍　　台南芸術大学建築芸術研究所学生・台湾
　垂水英司　神戸・被災地市民交流会
　立石沙織　日和アートセンター
コーディネーター
　松村豪太　ISHINOMAKI 2.0

企画・ISHINOMAKI 2.0
共催・石巻アート台湾壁画プロジェクト

松村　それではただいまから、石巻アート台湾壁画プロジェクトのトークセッション「被災地とアート」を始めたいと思います。私は、ISHINOMAKI 2.0 の松村豪太と申します。

　まず、最初にこのプロジェクトの石巻コーディネーターである西條さんからご挨拶を受けたいと思います。

西條　こんばんは。皆さん今日一日壁画作業を頑張っていただき、ご苦労さまでした。天気も味方したようですね。さてこれからは、被災地とアートというテーマで議論するのですが、大変難しく、奥の深い問題です。また、台湾と日本それぞれ事情にも違いがあると思います。それらを乗り越えて理解を深め、今後の交流を深めるきっかけになればと幸いです。たくさんのご意見を出していただいて、活発な討論になることを期待しています。

松村　それでは、今日パネリストをお願いした方々に、自己紹介をしていただきましょう。まず、台湾の方々から、現在の立場や普段の活動などの紹介をお願いします。

林　　林純用です。私は台風の災害被災地の再建や、あるいは行政から委託された仕事で、芸術を活用した復興などに取り組んでいます。今日はよろしくお願いします。

呂　　呂沐⊠です。私は今年年末までは台南の大港を拠点にして芸術活動をする予定でいます。今日はよろしくお願いします。

巫　　はーい、巫宛萍です。台南芸術大学の建築芸術研究所の学生で、社区営造（まちづくり）にかかわって地域の再建を勉強しています。今日はいろいろ発言できればと思います。

松村　それでは次に今回のプロジェクトを石巻に繋いでくださった垂水さんです。

垂水　神戸から来ました被災地市民交流会の垂水英司です。会場にいる石井さんと二人で来ています。今日このようなセッションを開いていただいて大変感謝しています。

松村　それでは最後に、震災後石巻で活動しておられる日和アートセンターの立石さんです。

立石　石巻でアートインレジデンスの活動をしている立石沙織です。今日突然この席に呼ばれ少し緊張気味ですが、よろしくお願いします。

問題提起―アーティストに何が可能か

松村　それでは最初に私の方から、今日こうしたトークセッションを企画した趣旨をお話したいと思います。

3.11 東日本大震災で、石巻は最大の被害を受けました。多くの家が流され、多くの人命が失われました。まだ仮設住宅から出られず、心を病んでいる方もたくさんおられます。震災後、石巻には延 27 万人のボランティアが入ってきました。その中で多かったのが建築家、芸術家です。何かできることがあるのではないか、自分たちがやってきたことを発露する場があるのではないか、という気持ちだったと思います。

沢山のアーティストが
石巻にやってきた。
問題提起する松村さん

今日、皆さんと一緒に壁画を描いた高校生を連れて来てくださったのは、児童造形に長年尽くしてこられたアトリエ・コパンの新妻先生です。ある雑誌にこのようなことを書かれています。【注】震災直後、アーティストから何かできることはないかと相談を受け、お手伝いもしてこられました。その時大変困惑されたそうです。多くの人達が家を流され、まだ、住むところがなく、食べるものさえ不自由で、交通機関もない、電気も水道もない時に、はたしてアートに何ができるのか。

一方、アートの活動によって元気づけられた人達も居られる。仮設住宅の壁に描かれた一つの絵から元気をもらったという声も聞かれます。

何時の時点で、どんな活動をすればいいか
―プロジェクトの経緯

松村　今回の日台アートプロジェクトが、始まった経緯を垂水さんの方からお話いただけますか？

垂水　核心に触れた問題提起有難うございました。今日の実りある討論を期待しています。

さて私は、阪神・淡路大震災の復興を神戸市役所で 5 年間再建に携わった後、台湾の 921 地震が発生した時復興経験を伝えるため、台湾の政府からの要請で被災地を訪問しました。そこで台湾の復興に興味がわき、その後神戸の被災地と台湾の被災地の交流を長年続けてきたのです。

昨年の暮台湾へ行った時ですが、台湾の長年の友人からアート集団「新台湾壁画隊」が日本で活動する場を繋いでくれないかという申し出を受けたわけです。これが今回のプロジェクトのきっかけです。やはり、東北に繋ごうということになりました。これは、大変魅力的な提案だったのですが、一方では、先ほどから指摘されたように被災地とアートという大変難しい提案でもあると思いました。トランク以外に大きな宿題を提げて日本に帰りました。

悩みながら準備を進めた。
これまでの経過を語る
垂水さん

それで、震災の後に台湾の友人と一緒に訪ねた縁のある石巻の西條さんに相談を持ちかけました。それから半年以上になりますが、西條さんと相談し、台湾とも協議し、お互い思い悩みながら準備を進めてきたわけです。その悩みというのは、「何時の時点で、どんな活動をすればいいか」ということです。西條さんには板挟みでご迷惑をおかけしました。

今回はプレイベントです。本番は来年やろうということにしました。というのは、台湾からアーティストが来て絵を描いて帰ったというのでは意味がない。住民と交流を深めながら、時間をかけて実施することで、大きな成果に繋がっていくのではないかと期待しているからです。ということで今日を迎えたのです。

芸術に言葉は必要ない

松村　それでは次に、台湾からこられて、実際今日壁画を描く活動をされた 3 人の方々に、感想などを含めて発言をしていただきましょう。

林　　昨日被災地を見に行きましたが、その情況に大きなショックを受けました。台湾でも台風の災害など様々な現場を見ましたが、それとは比べものにならないような状況でした。私は台湾で災害の被災地で芸術を通した活動をしてきましたので、石巻に来る前から様々な考えをめぐらしていました。確かに最初問題提起されたように、まず芸術より生活の復興が大事だということは事実ですが、その生活の中に芸術という要素もあると思います。災害からの復興という大変ストレスの多い生活の中に芸術があることで、それが被災者にとって楽しみになり、大きな慰めになることがあると思います。

被災状況にショックを受けた。
発言する林純用さん

今日一日体験する中で最も強く感じたことは、私は日本語がよく解らないのですが、芸術には言葉は必要ないということです。芸術を一つの手段として、様々な交流を発展させることが可能だと感じました。

【注】「造形ジャーナル　Vol.57-1（平成 24 年 3 月 28 日発行）」所載・「被災者の立場で美術（支援活動）を考える」
アトリエ・コパン美術教育研究所　宮城教育大学講師　新妻健悦

理性を失った時に、感覚を取り戻させる力

松村　それでは続いて呂さん、お願いします。

呂　　私はイメージで絵を描くというタイプです。昨日は石巻で被災地を訪れ、大きなショックを受けました。それで、今日の作業を通して、心の中に大変重いものを感じながら制作しました。

私はいつも考えていることは、理性を失った時に、肌で感じるしか方法がない時に、芸術がどんな役割を果たせるかということです。たとえば、熱を出して苦しんでいる時、しかし、一方でどうしてもやらなければならないことがあるような、そんなつらい時に、芸術は力があるだろうかということです。

重いものを感じて制作した。発言する呂沐⊠さん

私は、芸術には、こうした時に理性を取り戻す力があると信じています。人間は、確かに食べることや寝ることが基本的な要求です。しかし、芸術も心のどこか基本的なところで、そうした力を持っていると思います。そして前へ進む勇気を与えてくれます。私がこれまで出会った事例の中でも、人に感覚を取り戻させる力に出会った経験があります。

だから、私はすべての体力と精神力を尽くして制作したいと考えています。

友達になる気持ちが大事

巫　　私は、まず、台湾の災害での再建経験のお話しをします。莫拉克台風で六亀小学校が大きな被害を受けた時、小学校の再建を生徒たちと一緒に考える活動に参加しました。私は当時建築の大学院へ入ったばかりで自負を持っていたのですが、挫折をしました。階段の外壁の設計をした時ですが、私が作った案について先輩から怒られました。それは被災地では役に立たないといわれたのです。先生と先輩に怒られた理由は、災害現場に入る前に自分をゼロにし、そして被災地の様々な状況を受け入れ、問題をよく理解しなければならない、ということでした。そこで地域の皆さんと友達になって話を聞き、交流を深めながら作ったのです。小学生が一番好きなものを絵にしてもらって、それを組入れて設計し直したのですが、最初自分一人で考えた時に比べて、ずっといいものが出来上がりました。

ある時先輩から怒られた。経験を語る巫さん

今回、二人の李先生らと一緒に壁画の仕事をさせてもらいました。これまでは、壁画を制作する前に皆で討論して全体の絵の構図を決めます。今回は一緒に描く高校生が前日来られなかったので、それぞれのアーティストが大まかに描く範囲を決めて、現場で集団的に対応してくことにしました。いろいろなやり方があることを学ぶことができました。

台湾高雄の六亀小学校の再建は、子供たちも参加して行った。

日本では芸術に関しても厳しいステップを踏まなければならないと感じました。台湾では描きたいように描くということで、ちょっと自由過ぎるかも知れない。今日はとてもいい勉強になりました。

ちょっとしゃべりすぎたかな。すみません。でも今日は大変楽しいです。

松村　宛萍（ワンピン）さんの明るい人柄で、大変会場をリラックスさせていただきました。

さて３名のお話からすでに幾つかの重要なキーワードがでてきました。林さんからは、「芸術は言葉が要らない。」「食べることが重要だが、生活の色どりとして芸術も欠かせない。」と言われました。呂さんからは、「芸術は前へ進む勇気を与えてくれる。」「理性を失った時に人間の感覚を取り戻してくれる。」といったことが指摘されました。巫さんからは、「被災地に来て友達になるという気持ちが大切。」ということを言われました。確かに芸術は、ストイックに自分と向き合うことも大切ですが、被災地ではこのように人々と触れ合うことも大事だと思います。

常に日和アートが存在する意味

松村　次に、すでに今年の３月に横浜からこの石巻へ来て、被災地でアートインレジデンス活動をしておられる、日和アートセンターの立石さんからお話を伺いたいと思います。

立石　私たちが活動を開始した当初から、今日もすでにキーワードとして出された「何時、どのような活動をするか」が大きな課題でした。というのは、私は被災者でもないし、外から来たものだからです。日和アートセンターが石巻にある意義は何だろうか、考え続けてきました。

いつでも触れられる存在に。抱負を語る立石さん

日和アートセンターの意義は、アー

ティストという少し変わった存在が、日常生活の中で、同じレベルにいて、石巻の方々と交流するということだと思っています。これは、ワンピンさんが言われた「友達になる」ということに通じるし、呂さんが言われた「日常感覚を取り戻す作用」に関係するかも知れません。私も、日常感覚を取り戻す力がアートには有ると信じています。ただ、日常感覚はそれぞれの人によって個人差があるのです。人それぞれのタイミングが来た時に、いつでも触れられるという意味で、常に日和アートセンターが存在していることが重要だと思っています。

「ちょっと待っといて」

松村　それでは、17 年前の阪神・淡路大震災の先達の経験から、垂水さんにコメントをお願いしたいと思います。

垂水　阪神・淡路の時もそうだったのですが、いろいろな立場によってギャップがあるということです。大災害の復興ではこれは避けられないと思います。私自身家族も失わなかったし、家も一部損壊ですんだ。いわば被災者でなかったと思っています。さらに、外から支援に入ってくる人とのギャップもある。被災地は、ギャップだらけといっていいでしょう。

　さらに、時間の経過で状況が物凄く変わってくるということがあります。最初人の命を救うという段階から、時間の経過とともに、ニーズも、支援者の行動や気持ちもどんどん変わっていく。この変化を長い目で、10 年とか、20 年とかのスパンで考えることも必要と思います。私自身も後で後悔することもたくさんありました。震災直後は大変忙しかったので、いろんな申し出、例えばアメリカなどからもありましたが、沢山断りました。今思えば、断るのでなく、「しばらく横の置いておく」というか、「ちょっと待っといて」という対応も大事だと思っています。

　阪神・淡路の時のアートの役割は、今ほど大きくなかったと思います。たとえば、野田北部地区の復興過程で、街に壁画が描かれたり、ドキュメンタリー映画が作成されたりした事例がありますが、これらについては後程もし時間があれば紹介します。

震災後、沢山の壁画が描かれた
神戸・野田北部地区

松村「ちょっと待ってくれ。」というのは、今の私たちにとって大事なキーワードのように思います。西條さんも同じお気持ちと思います。

母を喜ばせたいと始めた活動が商店街に広がる

松村　それでは、ここで今日会場に来られているお二人の方に発言していただきます。お二人は石巻の方で、震災後それぞれのやり方でアートと関連した活動をされています。

天野　初めまして、天野由紀といいます。私は家族を失ってはいないのですが、実家は被害を受けました。私は仕事で県外に住んでいたのですが、テレビの映像を見て、これはただ事ではないと感じました。ヒッチハイクで帰ろうとしたのですが、途中で断念、その後 1 カ月ほど家族に会えませんでした。

アートでできることが少し見えた。
経験を語る天野さん

　自分に何ができるか悩みました。私は趣味で絵を描いていたのですが、大きなショックを受けた母を喜ばせたいという思いで、崩れた外壁に母が好きだった桜の絵を描いたのです。母だけでなく近所の方も大変喜んでくれて、壁いっぱいに桜を描きました。

　それがきっかけになって、ボランティアの薦めもあって、商店街で絵を描くことを始めたのです。商店の方々も個々にいろいろな事情を抱えておられます。私は深いところまでお話をして、どんな絵を描いてほしいかを聞きとっていきました。心を許していただくようになって、この活動はどんどん広がっていき、50 か所位のところに描きました。活動の中で知り合ったアーティストの方々を含め、ここでできることが少し見えてきたと思っています。

沢山のアーティストに会えて、人生が変わった

松村　それでは続いて、学校の美術の先生で、美術を通して子どもたちとの交流を進め、造形的ワークショップなどをされている梶原さんからお話を伺います。

梶原　門脇中学校の梶原千恵です。隣の女川町に住んでいます。私は、震災の後横浜や東京からやってきた沢山のアーティストに、生まれて初めて出会いました。そのことで人生が変わったような気がしています。それまでは、美術は個人の活動だというように思っていたのですが、街のおじさんや、おばさん達が喜んでいる姿を見て、

ぜひ、又来てください、
と語る梶原さん

アートの力を実感しました。これからも、地域の人達と一緒にいろいろなことをやっていきたいと思っています。ただ、地元の人だけでは出来ないことなので、台湾や東京、横浜など外から来てもらうのはありがたいと思っています。ぜひ又来てください。

松村　人生が変わったというのは、凄いですね。

「ピカチュウを描いて」にどう応えますか？

松村　さて、ここで私の方から一つ問題提起したいと思います。それは、アーティストの思いとクライアントの思いの関係です。

もともとどんなアーティストでも自分の思いというものがあります。今日、壁画の共同作業する時、新妻先生は、一つの構図を決めてしまってそれを分担するのでなく、それぞれのアーティストが自分の思いで描いていく方式を提案されました。構図を決めて分担すれば単なる作業になる、それぞれが自由に描きながらコラボレートしましょうと提案されました。

一方、被災地では被災者というか、クライアントの思いをしっかり受け止めないといけないということがあります。

ブラジルのアーティストが描いた壁画
（石巻開成仮設団地）

石巻でブラジルのアーティストが仮設住宅の外壁に絵を描いたのですが、描く前に住民とディスカッションをしました。住民はドラえもんやピカチュウを描いてほしいという注文を出した。これに対して、アーティストは大変悩んだそうです。アーティストは自分の才能を十分発揮したいと考えている。単に注文に応じるということなら業者に頼むのと変わらない。

アーティストの思いとクライアントの思いの関係についてパネラーの皆さんにご意見を伺いたいと思います。

被災地に芸術を持ちこむには信念が必要

林　石巻に来て３日になりますが、皆さん方の心配りと誠意を感じています。

私は莫拉克台風の時、小林村の杉林仮設住宅でも活動しましたが、まず入ったのは、以前３年間活動したことのある嘉義県のお茶の産地・太和集落でした。台風と水害によって大きな被害を受け、危険な土地から離れようとする人もいました。私たちは台風の経験を反省し、土地とくらしの関係を考え直し、茶畑の真ん中や川沿いに深く根を張る樹を植える計画を作りました。これも一種のアート活動だと思います。しかし、

茶畑に植樹をする。
手前の人形は土地の守り神。
台湾嘉義県太和集落

これは農業委員会の仕事だと考えた政府（教育基金会）には受け入れられず、予算はつきませんでした。そこで、自分たちで 5,000 株の樹を募集することにしました。防災や環境保護のため樹を植えることは、日当たりも悪くなりお茶の生産量にとっては不利です。しかし、住民達はこの計画を受け入れました。大変大きな一歩だったと思います。

被災地に芸術を持ちこむことは、方法や技術の問題ではありません。みんなの信念の問題です。意義があると信じるなら、自分たちの能力の範囲内でやれることはあるし、力一杯頑張りたいと思います。

また、現代社会は専門分野によって細かく分けられています。しかし、一人一人の人間は分けることのできないものです。芸術はそのように分割されたものを結合させる力を持っています。芸術の力で、専門や民族の垣根を越えていきたいと思っています。

靴を脱いで、そこの土を踏むことが大事

呂　とても抽象的な言い方しかできないことをお許しください。芸術家は一つの信念を持っています。信念があればこそ、現実的なことを無視することもできるのだと思います。

地域に入る時に、自分が観察者として横に立っているということでは、地域の人とのコミュニケーションはできないと思います。靴を脱いで、そこの土を踏んで、その土地の温度を感じなければ、住民の皆さんの気持ちを感じることができないでしょう。

台湾で制作中の呂さん。
「眼蟲計畫」ウェブサイトから

私はピカチュウを描いてくれと言われたら、私は描きます。そういうニーズがあるからです。それによって、芸術家という枠組みから解放されます。芸術家は教える立場にあるのでなく、教えられる立場です。この過程は時間のかかる過程でもあります。

巫　私は芸術家ではありません。地域に入って観察しながら建築を学ぶ学生です。そうした活動のなかで、住民のニーズの特色を探し出すのが大切だと思っています。ピカチュウを描いてくれと頼まれたら、なぜそうしたいニーズがあるのか、なた、どんなピカチュウ

があるか、聞き出しながら描いていると思います。

芸術家と住民のギャップをどのようにして埋めていくのか。両方が信じあいながら、生活の背景や夢を語ることによって解決するしかないと思います。

松村　答えのない難しい問題提起に対し、皆さん大変真摯にお答えいただきました。信念を持つこと、教えられる立場であること、靴を脱いで土を踏む必要がある、など心に留まる発言をいただきました。

芸術に対する信念と感受性が大切

松村　時間も押してきましたが、ここで会場からの発言をお願いしたいと思います。

李　今日のようなセッションは、台湾ではあまり機会がないのですが、今後被災地へアーティストが入ることが多くなることを考えると、参考になります。

意義あるセッションだ、
と感想を述べる
アーティストの李さん

昨日石巻に来て被災地を見てショックを受け、これまでの方法ではいけないと、心の中で準備をしてきました。今日一日壁画を描くなかで一筆一筆にその影響が出たことを実感しました。また、ホテルを出てさびしい街を見ながら、激しい表現になりました。

芸術家として被災地に入る時、大切な事が二つあると思います。一つは、芸術の力を信じることです。人が一番苦しんでいる時、芸術が形にならない力を与えることを、私も経験しています。二つ目は、呂さんも言われたように、自分に一番強い感受性を発揮することです。強い信念と誠意を持った作品は、必ず力を持っていると思います。

アートは答えが一つでない

伊藤　日和アートセンターで活動している伊藤悠です。私は普段は、アートと人が出会うネットワークをつくる仕事をしています。今は、東京からバスで日和アートセンターに絵と人をバスに乗せて来て、初日には絵のパレードを商店街で行います。私がこうした活動をしようと思ったのは、一昨年女川の梶原千恵さんに会った時、「元気な人達は力を持っている。本物の絵を見せたい。」と言われた言葉を覚えていたからです。彼女がやっている「みんなの表札展」を見た時に、改めてアートの力を感じることができました。アートは人を勇気づける、人達を結び付けることができると確信しました。私が今日この場に来ることができたのは、日和アートセンターに皆さんが訪ねてくださった縁があったからです。

アートと人を結びたい、
と語る伊藤さん

アートは、A の答えが必ず B といったように一つとはかぎりません。表現を通じて自分なりの復興の方法が見つかるような支援をしていきたいと思っています。今、「一枚の絵の力」という展覧会をしています。また、日和アートセンターへ来てください。

蒋　壁画プロジェクトのコーディネーターをしている蒋耀賢です。伊藤さんが発言されたので、今、私は思い出しました。昨日、李さんが壁画を描いている現場で、彼女から「一枚の絵の力」という宣伝ハガキを手渡されました。それは、今、日和アートセンターで行っている展覧会の案内でした。実は私たち、最近アメリカのあるところから、一つの講座へのオファーを受けました。そこで私たちが提出したテーマが、なんと同じ「一枚の絵の力」だったのです。この偶然の一致は、何か本当に「神秘的な力」を感じたのです。

神秘的な力を感じた、
と語る蒋さん

有難う！

アートで石巻が変わる…そんな期待も

松村　最後になりますが、地元を代表して西條さんから、発言お願いします。

西條　今日は被災地とアートという難しいテーマにチャレンジしていただいて、皆さんに感謝いたします。アーティストがこんなにたくさん石巻に入って活動したのは初めてでしょう。

台湾と日本は事情が違うといいますが、東京と石巻もまた違いがあります。石巻は石巻の文化は東京に比べると伝統的な文化が強く、被災した当時の支援はこうした伝統的な文化が中心でした。今、1 年 5 カ月が経って、アートが新しい文化として石巻に入ってきています。そうした時期になってきているし、又、受け入れていこうという時期にもなってきています。石巻はアートによって変化した街と呼ばれることになるかも知れません。

来年の春の活動につなげたい、
と挨拶する西條さん

アーティストの活動は作品だけでなく、コミュニケーションを大切にして活動している点が非常にいいと思います。アートに縁のなかったおばあさんが、コミュニケーションしているところも見ました。また、石巻にこんな沢山若い人がいたのかと驚きました。こうした人達の力によって、街を変えていけるかも知れないと期待が高まります。

最後に、来年の春の活動に繋がって、大きな成果が生まれることを目指して努力したいと思います。

松村　時間が相当オーバーしてしまいました。今回のテーマは簡単に結論が出るものではありません。垂水さんもこのプロジェクトを１回で終わらせてはならないといわれているように、来年の本番の活動を含めてこのテーマも深めていきたいと思います。今日はパネラーの皆さん、ご出席の皆さん有難うございました。

それから素晴らしい通訳をしていただいた、林亭儀さん、鐘心怡さんに感謝いたします。

熱心に聞き入る参加者

鐘心怡さん（左）、林亭儀さん通訳ご苦労さま

参加者名簿

台湾・新壁画隊

班	氏名	現職
総務班		
	陳正哲	団長　南華大学建築・景観学科　主任
	蔣耀賢	コーディネーター　白屋運営長
	郭哲雄	白屋理事長
	李惠瑛	白屋理事長夫人
	何美慧	螺陽基金会執行長
記録事務班		
	陳志鵬	写真撮影　高雄市仕隆国民小学　教師
	張芸慈	計画管理　白屋
	李家綺	映像記録
壁画制作班		
	李俊賢	アーティスト　高苑科技大学建築学科副教授
	李俊陽	アーティスト
	郭育廷	アーティスト
	巫宛萍	国立台南芸術大学
	謝佩純	国立台南芸術大学
積木都市班		
	江宛⊠	スペイン留学生
	林書楷	アーティスト
	呂沐⊠	アーティスト
	焦聖偉	アーティスト
	呉權文	南華大学
	林信成	国立台南芸術大学
	劉貞怡	嘉南薬理大学務処
チョーク絵班		
	郭珮君	嘉南薬理大学教授
	林純用	アーティスト
	黄志偉	アーティスト
	梁舒⊠	国立台南芸術大学
	呉嘉銘	嘉南薬理大学文化事業科
	蔣秉澄	中山高校
通訳		
	林亭儀	仙台在住
	鐘心怡	山形在住
台湾テレビ取材		
	張光斗	点燈文化協会　創会理事長
	曾慶瑜	レポーター　タレント
台湾		
	陳玉蒼	実践大学高雄校区助理教授
	李宜欣	実践大学助理教授

日本・参加者

地域	氏名	職
石巻関係		
	北村悦朗	石巻市副市長
	佐藤義則	石巻市企画部市民協働推進課　課長
	朝日ひかる	石巻市企画部市民協働推進課　主事
	久我恵美子	石巻市国際交流協会会長
	西條允敏	石巻市文化協会会長　街づくりまんぼう社長
	山田正明	石巻市文化協会　専務理事
	松村豪太	ISHINIMAKI2.0　代表理事
	小泉瑛一	ISHINIMAKI2.0
	菊田貞吾	コンシェルジュ石巻
	新妻健悦	アトリエ・コパン美術教育研究所　代表
	新妻悦子	アトリエ・コパン美術教育研究所　副代表
	高橋梨紗	仙台第一高等学校３年　アトリエ・コパン
	神田瑞季	県立宮城野高校２年　アトリエ・コパン
	天野由紀	石巻アーティスト
	梶原千恵	石巻市立門脇中学校教諭（美術）
	佐々木喜蔵	前宮城健会議員
	浅野仁一郎	秋田屋　社長
	中山敏江	南華園
	立石沙織	日和アートセンター
	伊藤悠	日和アートセンター　island JAPAN 代表
	相澤芳雄	相澤商店　代表社員
	岡拓真	石巻市立飯野川中学校
	岡麻知子	石巻市立石巻小学校
神戸関係		
	島田誠	神戸文化支援基金　島田ギャラリー代表
	垂水英司	被災地市民交流会
	石井修	被災地市民交流会
	小林郁雄	被災地市民交流会
	青池憲司	映画監督
	福留邦洋	被災地市民交流会　東北工業大学准教授
報道関係		
	高橋邦和	NHK 仙台放送局
	秋山裕宏	石巻日日新聞
	佐脇俊之	読売新聞東京本社

大槌壁画プロジェクト

大槌アート日台共同プロジェクト

台湾壁画隊行程

8/3（金）				青池組	
8/4（土）					
8/5（日）	14：30 東京成田空港着 21：40　夜行バス　池袋発大槌へ				神戸組
8/6（月）	7:00　夜行バス大槌着 10:00 工作会議 午後　現地視察 夜　足場設置（北側）	大槌高校美術部			
8/7（火）	作業開始		神戸大学近藤研究室		
8/8（水）	作業②				
8/9（木）	作業③ 足場設置（南側）				
8/10（金）	作業④ （廖、王貞儒、釜石へ）				
8/11（土）	作業⑤				
8/12 (日）	作業⑥				
8/13(月)	作業完了				
8/14(火)	9：00　大槌出発 11:00　大船渡ベース 長洞　女川 17:35　石巻　着				

活動記録

8月5日に至るまで

偶然の出会いから生まれたプロジェクト

そもそもここ大槌ベースに壁画を描こうということになったのは偶然のめぐり合わせだった。それは、3月28日のことである。台湾壁画隊が石巻で行うプロジェクトの事前準備のため、壁画隊のスタッフと新故郷文教基金会及び神戸の被災地市民交流会メンバーが東北を訪れた際、たまたま大槌ベースに神田神父が来ることを知り、ベースで合流することになった。布団敷きの大部屋で一同雑談に花を咲かせていた時、神田神父がこの大槌ベースの壁面を壁画隊に飾ってもらったらどうか、明るくなるし、目印にもなる。一同、「それはいいな。」「好的、好的！」

そして、ベース長の古木神父も「やりましょう！」と決断された。オーナー道又氏の積極的な承諾も得られた。その後、さまざまな問題も出てきたが、一つ一つ解決でき、さあ、いよいよ実施ということになったのである。台湾からは、ペーパードームを移設した地・埔里で活躍する、新故郷文教基金会を中心にしたアーティストやスタッフ13名が大槌入りする。1週間ほど滞在して、大槌町民の皆さんとも交流しながら壁画制作をする。

足場をかけての大作業。事故なく、上手くいきますように！

布団敷きの大部屋で生まれたプロジェクト

8月5日

先着した青池組

まず、最初に大槌入りしたのは、今回の大槌の活動を撮影する青池憲司監督と青池雄太さん及び山田カメラマンの青池組スタッフである。この活動をドキュメンタリー映像にしようという計画が持ち上がったのは、わずか一月前のことである。神田、青池、垂水で相談の結果、被災地市民交流会が青池組に制作委託して作成する手はずが整った。青池組は3日には釜石入り、4日にはカリタス大槌ベースを訪ねるなど、撮影準備を進めつつあった。

えっ、足場が9日！

午後神戸から垂水、小林が到着、夕方にはカリタス大槌ベースへ。古木神父、青池組を交え、明日朝到着する台湾チームを迎える段取りなどを確認した。台湾組は、既に東京成田空港に無事到着の連絡が入っていた。

足場業者に「明日お願いしますよ」と確認の電話をする。「9日に行きます。」と驚きの答えが返ってくる。以前、古木ベース長と共に、台湾組は5日に到着、7日から作業するので6日に頼んだはず。5日に着くから、それ以降でいいと思っていたらしい。それは困る。「今日は日曜なので、明日検討してみる」ということに。

8月6日

台湾チーム到着

台湾チームは、昨夜21:40に池袋出発の夜行バスに乗り、今日7:04に大槌へ到着する予定である。古木神父、青池組、神戸組が待ち構える中、定刻より少し遅れて到着した。丸1日の長旅でさすがに疲れ気味。ニーハオ、お疲れさん。それではと、大槌ベースへ向かう。

総勢13人、これから8日間大槌ベースに寝泊まりする。ボランティアが集中する夏休みだが、大部屋一つとツイン3部屋を確保してもらっている。夏の合宿といった趣だ。

大槌到着

10時から工作会議

休む間もなく10時からカリタス大槌の1階食堂で工作会議。台湾チームに加え、古木ベース長、建物オーナーの道又氏、このプロジェクトのパートナーとして参加していただく大槌高校美術部の生徒さん達、神戸組、青池組が参加して始まった。古木さんが進行を務める。一通り出席者の自己紹介が

夏の合宿？

アーティストリーダーの張家銘さんを囲んで打合せ

終わったあと、どんな壁画を描くかの議論に入る。

実は、数日前に台湾の３人のアーティストから「希望の樹」というテーマで壁画の提案が届いていた。まずそれをここで披露してもらいましょう。３枚の提案が壁に貼られ、その前で陳宗勳さん、廖珮如さん、張家銘さんが,それぞれ自分の提案のプレゼンテーションを行った。

陳宗勳さんは、「津波の暗闇から抜け出し、幹の両側からは逞しい枝が伸び、大きな力士がガッツポーズをするかのように、この大樹の逞しさを表したい。梢には多くの花が咲き、希望がわき出ることを象徴し、両側の鳥たちは喜びの歌を歌い、背景には未来の光明がさすさまを表しています。」と語った。

プレゼンする陳宗勳さん（上）
廖珮如さん（下）

廖珮如さんは、「主要画面は、ケヤキとサケを創作テーマとし、高く大きなケヤキは左側に立ち、大地と海を守っている。重なり合うサケ達は、青色系統で描いて大海と大漁を表したい。ケヤキの葉型の船は、子供たちを乗せて希望へ船出する。カモメ、つつじを画面に配し、空間の重なりや豊かさを作ります。図中の景色、事物は、現地の確認や皆さんの参加のもと再調整したい。」と提案した。

張家銘さんは、大槌を代表するケヤキ、サケ、つつじをモチーフにした案を提案した。

壁画案決まる

高校生たちも自分が描きたいモチーフを画用紙に描いてきている。これも壁に貼って説明した。さて、壁画はどれがいいか、どのような意見をお持ちでしょうか？古木神父は、オーナーの道又さんに意見を即すが、特定するような言い方はされない。神戸組の方にも意見を即す。「陳さんの力強い樹がいいと思うが、もう少し樹とわかるような表現を。」とか、「魚の大群を南側の２階部分に描いたらどうか」とか、少し踏み込んだ意見が出る。まとめ役の古木さんは、北面は陳さんの原案の上部に枝や葉を補足して大きな樹を描く、また、南面はサケの大群を描こうということで決定した。今晩中に、それぞれ提案を修正して明日に備えることに。お疲れのところ、よろしく。加油！

壁画以外に、100 号キャンバス 12 枚を台湾が用意してくれている。ここには、自由に個人や共同で作品を作ろうということになった。

お忙しい大槌高校藤田先生も会議の終わるころ駆けつけてくださった。

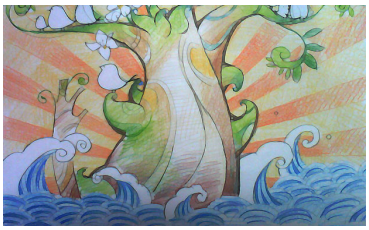
午後は現場視察

午後は大槌の被害状況を視察する。カリタス大槌の大型マイクロバスに乗って出発、まずは吉里吉里へ、そして安渡の漁港あたりで下車。雨が降ったりやんだりの空模様である。これから一週間の予報はあまり芳しくないが、天気だけは運に任すほかない。その後山合いや川沿いを走って仮設住宅の様子を見る。狭い道で大型車をなんなく運転する古木さんの技量に、台湾勢から歓声も上がる。

明日からの作業に必要なバケツ、安全ベルト、ヘルメットなどを購入のため、ホームセンターへ立ち寄る。この時、釜石でシンポジウムを企画している別の台湾グループがバス停に着いたとの知らせが入る。黄世輝さん、李宜欣さん、麗燁さん、陳玉蒼さんの 4 人を、バス停でピックアップしてカリタスベースへ戻る。日本の被災地で出会ったかねて周知の彼らは、話に余念がない。

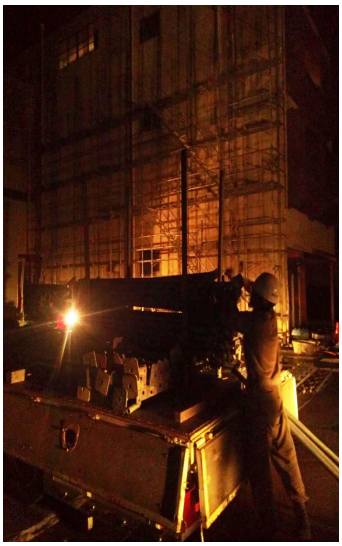
足場夜間工事

ところで足場である。午前中に足場業者に電話してみると、都合つけるのは難しいという。それは困ると押し問答。一部でも早くやれないかとさらに検討を要請する。午後になって、今日の夕方別の現場が終わってから駆けつけ、北面だけ架設するとのこと。いや、ともかくそれ


陳宗勳さんの案

廖珮如さんの案

張家銘産の案



夜間工事、ご苦労さま

で頼みます！
6時前、足場材料を積んだトラックが現れる。濃紺の作業服に身を固めた職人4，5人が降り立ち、手際良く足場を組み立てていく。なかなかお見事。「お疲れさん。よろしく頼みます。」と声をかける。

8月7日

さあ、今日から作業開始

用意してあった塗料を昨日買ったバケツに移して調合する。足場の網を巻き上げ、壁面にはまず下塗りを全面に施していく。地上では、カンバスも何枚か立てかけていく。すでに、不舞と雅慕伊のツォ族親子がカンバスにイノシシを描いている。早いな。彼らは感性を大切にし、迷うところがない。

イノシシを描くツォ族親子

作業が一段落したところで、11時半頃から第2回目の工作会議を開く。古木神父は所用で外出のため、垂水が進行。昨日の工作会議の後修正した壁画案を、担当アーティストが再提案した。これで、本格的に壁画制作がスタートする。

また、かねて交流のある被災地などへ贈呈するため、20号キャンバス10枚を追加購入することにした事を報告する。

大槌町長など訪問

台湾チームの団長廖嘉展さんとアーティスト代表の張家銘さん、そして神戸組が連れだって大槌町の関係者を訪問することに。大槌町の仮庁舎は、町立大槌小学校の元校舎を改修したもので、昨日移転したばかりである。まずは、大槌の区画整理事業などを支援するため、神戸市から長期派遣されている、地域整備部相談役の青木利博さんを訪ねる。彼は、921地震が発生した時、神戸市から経験を伝えるため訪台したメンバーの一人でもある。

続いて、碇川町長室へ。折よくご在室で面会できた。神戸組の小林さんがFB友達で、メールで送った「蓬莱島に虹がかかる写真」が大層気にいっていた町長は、昨日の仮庁舎の記念品にも使ったということで、話題が盛り上がる。壁画の話をすると「蓬莱島と虹もぜひ描いてほしい」とリクエストがでる。

ベースに帰って古木神父に相談する。虹を描くとなると南側も全面足場が必要となる。「解りました。」との快諾で、南面もサケ、ひょうたん島、虹など含む大パノラマ画面になることが決まった。

巧みに下書き

すでに陳宗勳さんは、大樹の下描きを始めている。壁面下部に位置記号を数字で印し、概略図を片手に足場を上下縦横に飛び回りながら、目検討で巧みに墨色の曲線を描いていく。おーっ、なかなかの芸当といえる。

それにしても明日からの天気が気になる。足場の最上部に雨よけのシートをかぶせることにし、夜中に屋上へ上がって作業をした。

この日、明日から始まるワークショップを控え、神戸大学組が大槌入りした。

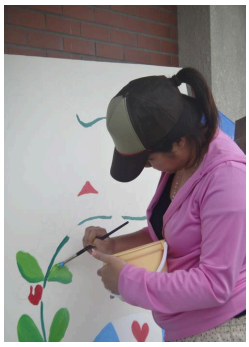
どんどん進む大樹の下書き

8月8日

作業もエンジンかかる

南面の大樹は、出来上がった下書きにしたがってボランティアが色を塗っていく。次第に大樹の姿が浮かび上がってくると、ますます筆の運びにも気合が入ってくる。北面も全面に足場を架けるようになったので、電気の外部引き込み線に触れる恐れがある。電力会社に頼んでカバーをしてもらうことにする。

キャンバスの創作も広がってくる。大槌高校の美術部の学生と台湾メンバーがコラボして創作する作品があり、又、個人創作の作品もある。タイからの留学生で神戸大学の院生Titayaさんも、ぜひ自分の作品を作りたいと申し出て創作を始めた。



午後になって、このベースに壁画を描けないかと提案した神田神父も到着した。順調に進んでいる様に満足げだ。

何事かと立ちどまる人や車がひっきりなしだ。チラシなどを渡して説明すると、「頑張って」と逆に激励される。

絵の具騒動

作業にエンジンがかかったせいか、絵具が足りないので追加したいという。また、購入済みの赤がピンクに近く、別の赤を注文したいという。当初注文した神戸の塗料店 M 化成に電話をするが、以前相談した担当者は休暇で連絡が取れない。応対した若い女性担当者は、別の赤を注文されてももう盆休み、メーカーが対応できませんと困惑した様子。その内、以前の担当者の自宅から電話がかかる。色見本の写真を送ってもらったり、すったもんだの末とりあえず注文が済んだ。ぎりぎりセーフ！

しかし、作業を継続していると、そんなにも必要ないということがわかってきた。結局はあくる日、追加注文の大半はキャンセルに。こんな大作の制作だから、この程度はささやかなエピソードといってよい。

神戸大学ワークショップ

午後２時から、マスト２階多目的ホールで＜高校生と描く大槌町の「みらい」ワークショップ＞画開かれた。美術部の学生さんもそちらに参加。
河北新報の玉應雅史記者がカリタス・ベースに取材に訪れる。古木神父らに取材し、ワークショップの会場へ。その後戻って廖さんらの取材も出来た。13 日に写真を撮りに来るという。

8 月 9 日

作業は続く

心配された天気も崩れることはない。希望の樹は順調に進んでいく。青池組も撮影が続く。台湾の顔さんもビデオを回しており、インタビューも試みる。

カリタスベースのスタッフや神戸組も一緒

作業が進む裏には大槌ベースのスタッフの支えが大きい。ともかく、壁画作業の宿泊、食事、作業基地のすべてを担っている。「ご迷惑をかけます。有難う、多謝！」それから通訳担当の王雪⊠さんにはいつもお世話になります。

ところで、神田、垂水、小林の神戸組はそれぞれ用事があり、この日の午後引き上げる。後ろ髪を引かれる思いで立ち去った。「事故のないようにね。」
（8 月 10 日以降の活動記録の記述は、主に台湾の資料に依っています）

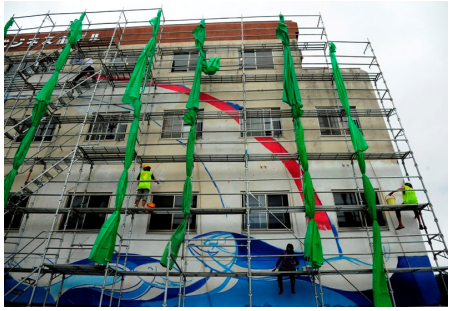
南面足場もかかる

南面は足場の設置が遅れ、壁画の着手がままならなかった。一層分だけは２日前から仮設されていたので、とりあえず下の方の下書きに取り掛かる。夕方、やっと南面の足場設置が始まった。これで明日から本格的に「希望の虹」の作業に入れる。天気が崩れないことを祈りたい。

8 月 10 日

“希望の虹”、そして鮭、ひょうたん島、カモメ

遅れていた南面の足場もついに架かって、“希望の虹”の作業が本格化する。こちらを担当するのは、廖さんと張さん。地元の方々の提案などを取り入れ、大槌湾に架


窓の多い壁面、レイアウトに苦労した

かった虹、大槌を代表する南部鼻曲がり鮭、ひょうたん島、カモメを描くことに。こちらの南面は、窓が多いことや、津波によってついた壁の傷を残さなくてはいけないことから、ここに至るまでレイアウトにずいぶん苦慮していたようでした。

ドキュメンタリーの撮影も佳境に

青池組も連日の撮影が続き、今日は台湾の人達のインタビューだ。それぞれ、壁画へかける思い、大槌の人々への思いを語った。最初に、女性アーティスト廖珮如さん。実は、廖さん、足場に上るのはこれがはじめてだったと告白。これまでは怖くて上ることが出来なかったとのこと。それでも、大槌の復興へ向かう姿に勇気をもらって、上ることが出来た。「私のはじめての足場体験を大槌に捧げました」と微笑む。

続いて台湾チームの執行長、いつも笑顔の顔さん。顔さんは「壊れた家の隙間からは、草や花が生えてきて、私たちを勇気づけてくれた。その生命力を、この絵に託した」と答える

「希望の樹」の作者、陳さんもインタビューを受ける。陳さんは「ここを通る人が、僕の絵を見て、しばし心を休めてくれたら」と期待を語る。NHK テレビの平野康人記者も、この 30 歳のアーティストを取材した。

8月8日

「希望の樹」「希望の虹」順調に進む

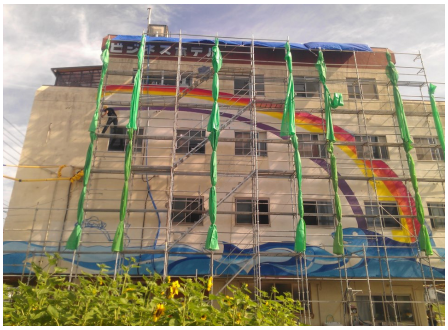
追加した絵の具も到着した。廖珮如さん、張家銘さんは、今日も南壁面の作業に余念がない。足場にのぼるのが不安だった廖珮如さん、すっかり慣れてきた感じだ。でも気をつけてくださいよ。

「希望の樹」の大木はほぼ完成。これからは小鳥や花を書き加えていくことに

NHK の平野康人記者が 2 度目の訪問。夜 NHK テレビニュースで報道されるとのことだ。

今日は震災記念日 811

今日は丁度 311 から 1 年 5 カ月の記念日、すべてのメンバーが 2 時 46 分の地震発生時に黙とうする。今日は被災地の様々なところで、シンポジウム、黙とう、仮設での記念行事が行われた。


「希望の虹」が姿を現す

夜は、「ライトアップ・ニッポン」のイベント会場となった、きらり福幸商店街へ。ツォ族の雅さんは、「勝負服」の民族衣装に着替えて出発。真っ暗闇の道を歩き、大槌川にさしかかる頃、夜空に花火が打ち上がる。一同、足を止め歓声！　日本の花火を楽しむ。

会場に到着。浴衣の貸し出しサービスがあると聞いて、女性陣は楽しみにしていたが、残念ながらこの時間に終わっていた。しかし、会場で配られていた花火を、地元の子供たち、遊びに来ていた大槌高校の三浦晶子さんらと楽しむ。

地元の子どもたちと

飲食店で、席を譲っていただく

台湾のメンバーが食事をしようと居酒屋へ入った時、すでに満員だったが、台湾から来たのだとわかると、居酒屋の客が皆立ち上って、311 の支援を感謝しますと挨拶しながら、席を譲って座らせてくれた。

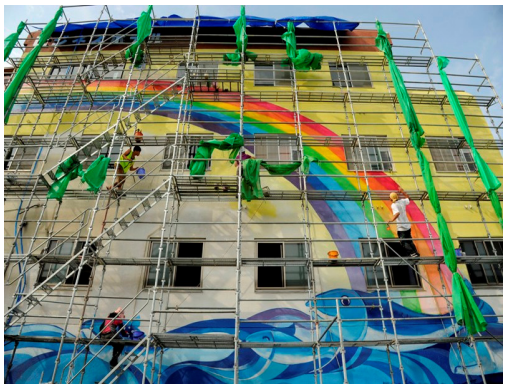
出がけに嘉展は、壁に書かれた励ましの言葉「頑張ろう！　行く手に希望あり。」を見ながら、店の娘さんに声をかけた。突然、彼女の眼が潤んで、真赤になる。彼は軽く彼女を抱き、背中を叩きながら…希望は永遠にある、あきらめないで！と励ました。

8月12日

「希望の樹」はラストスパート

希望の樹の最初の彩度調整が行われる。宗勳、健棠と宜貝の若いメンバーは、昼ご飯は弁当ですませ、時間を節約してラストスパート、若者のやる気はなかなかのものだ。実際、6日間休みなし、疲れているのだが、心意気でなんとか持ちこたえている。

構図、色彩、彩度など何度も塗り替え、ついに朝日が現れ、人々に温かい希望の光を投げかける様子が表現できた。みんなが心を一つに協力の賜物と誇らしく思う。きっと人々の心に響く作品だと信じる。



「希望の虹」も七色に

「希望の虹」も佳境に

虹も7色になり、こちらも作業は佳境に入る。

読売新聞記者鷹見安浩が来訪した。廖嘉展さんは、私たちの出来ることはわずかだが、ここに残した絵が、人々に未来に対する勇気を鼓舞する助けになればと述べる。

テレビ報道に大きな反響

昨夜、NHKテレビで報道されると、大きな反響を引き起こした。たくさんの方が立ち寄って下さる。建物オーナーも友達を連れて見学に来られた。また、漁業組合からは貝柱など海鮮物を送っていただいた。大槌のみなさん、私たちこそ元気をもらいました！

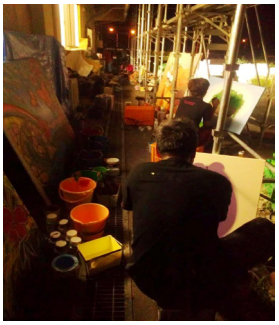
台湾新故郷基金会・日本大槌高校美術部の復興ボランティアによる共同制作
虹が祝福、鮭が祝福、蛙が祝福、蝶々が祝福、ふくろうが祝福、温かいハートでの祝福。希望の樹、希望の大槌、希望の未来。

高校生の皆さん、再見！

長い間一緒に作業を共にしてくれた大槌の高校生は作業を完了、今日でお別れになる。言葉はあまり通じなかったけど、心は互いに通い合った。藤田先生も本当に有難う。みなさん頑張って！　また、必ず会いましょう。

残業で追い込み

残りの作業日も明日1日だけ、そろそろ追い込みだ。夜間も照明をつけてそれぞれ担当の20号キャンパスに向かう。



夜間も、キャンバスに向かう

8月12日

壁画も発酵が始まった!?

毎日のように見に来て、日本語で最大の褒め言葉をかけてくれるおじさんがあった。今日は自転車でキャンディを買って、作業している人達に差し入れをしていただいた。作品が気に入っていただいたのか、本当にありがたい。大槌ベースの壁画も発酵が始まったといえる。

キャンディの差し入れに感激

「希望の樹」は、花や蝶々がやってきて、鳥が歌いだす。最後の仕上げの段階だ。

「希望の虹」は、蓬莱島の上に一筋の虹、復興の兆し、カモメが飛ぶ、希望に向かう、沢山のサケが回遊する。古木神父の笑顔に、ほっとする

遂に完成、全員興奮を抑えられない。3日間長崎に戻っていた古木神父が夕方帰ってくると、急いで二つの壁画を確認する。想像以上に素晴らしい出来上がりに、思わず笑顔が。「よかった」、それを見て台湾のメンバーもほっとする。皆で記念写真という時、遠くの山に虹が現れ、カモメが飛んでいく。まるで神も祝福してくれているようだ。

人の心を繋ぐ、大槌の９日間

寝るとき以外は創作に没頭した７日間、２面の壁画、１２枚の100号キャンバス、１０枚の20号キャンバス。創作の質も量も大変なもの。毎日用具を水で洗った貞儒さんも、「大変だったけど、疲れなかったわ。」それは多分、喜びの気持ちがあったからと彼女は言う。喜びの心こそ良薬、そして無限の糧。

９日間の大槌での生活は、命を洗い、人の心を繋ぎ、新たな希望が芽吹くものだった。

笑顔の古木神父

上右　津波の到達点を印す

完成壁画の前で　上左・北面　下右・南面

8月14日

大槌を後に、石巻へ向かう

朝、いよいよ9日間滞在した大槌を後にする。さすがに熱い思いがこみ上げてくる。古木神父さんはじめスタッフの皆さん、本当に有難う！

古木神父運転のマイクロバスに、荷物や贈呈用のキャンバスを積み込んで出発、まずは同じカリタスの大船渡ベースへ向かう。

大船渡ベース

大船渡ベースは大槌ベースとは違って木造の平屋、周りも人家が建ち並んでいる。ハルノコ神父以下スタッフが出迎えてくださった。ベース内を案内していただいたり、懇談をした後、雅慕伊さんが描いた花の絵をプレゼントした。

11時頃、多賀城から迎えに来た壁画隊御用達の派手な色の大型バスが到着、それに乗り換え石巻方面へと出発する。ガイド役の福留さん（現・東北工大准教授）同乗してもらった。「ニーハオ」「辛苦了」

花の絵を手にするハルノコ神父を囲んで

長洞地区ではカエルの絵

次に立ち寄ったのは、陸前高田市の長洞地区。廖嘉展さんは、縁あってこれで3度目の訪問だ。仮設村の代表村上誠二さんとはNHK衛星番組でカエル談義をした仲である。

カエルの絵を手にする村上さん

今回は時間がないのでゆっくり話ができないが、着実に復興が進んでいる様子は確認することができた。前回よりも村上さんたちに落ち着きがある。張家銘さん作のカエルの絵をプレゼントして、長洞地区を後にする。

お昼は車内で予め買ってあった弁当を食べて時間節約、一路南下する。

交流のある南三陸の工藤さんは、お盆で留守のため通過する。「後でお渡ししまーす。」

女川では魚の花

途中、雄勝の被災地を視察した後、女川へ到着。

前回もお世話になった女川町復興連絡協議会の高橋正典さんと鈴木敬幸さんを訪ねる。

近況などをうかがった後、張さんが描いた花の絵を贈呈。ちなみに花びらの一つひとつは魚になっている。水産業が盛んな女川にはピッタリ。高橋さんから被災地外から忘れられないようにしていくことが大切と話されたことが印象に残る。

高校グランドにつくられた仮設店舗による「きぼうのかね商店街」を慌ただしく見学して出発。

高橋さんに花の絵を渡す張さん

石巻到着

バスが遅れないかと心配する石巻から、ひっきりなしに確認の電話が入る。予定より少しずつ遅れたものの、5時35分ころ石巻のバス駐車場に到着した。そのまま石巻の壁画活動の場所を一巡した後、6時から予定されている報告・祝賀会の会場へとぴったり到着した。

カリタス大槌ベース北面　「希望の樹」

趣旨・メッセージ

この大樹は津波の暗闇から芽生え、
幹の両側から力強い枝が伸び、
まるで力士が誇らしげにポーズをとっているように思える。
平和を象徴するハトの群れは大樹の上で楽しく歌ってる。
春の咲いた花に止まり、愉しげに花の蜜を吸い取る蝶々。
背景は未来の光と輝きを象徴しています。

作者紹介

陳宗勲　1983 年生まれ。国立彰化師範大学卒業、第 12 回 20 号倉庫芸術家。
2009 年，場所：20 号倉庫で、展覧会「入境」

カリタス大槌ベース　南面「希望の虹」

趣旨・メッセージ

蓬莱島に現れた一本の虹、
復興のうれしい兆しをもたらした。
天翔るかもめ、未来に向けて飛び込む。
ふっくらと成長した鮭は回遊し、
喜びに満ちた顔。

作者紹介

廖珮如　台北復興美工絵画組卒業。南投県美術学会会員、了無⊠礙画会会員、埔里新生代画会会員、埔里小鎮写生隊員，廖珮如美術教室責任者。

張家銘　1969 年南投県埔里鎮生まれ。日本名古屋芸術大学彫刻科卒業。国立暨南大学人類学研究所修士。埔里張家銘芸術センター主宰。

台湾・参加者

台湾壁画隊

役割	氏名	経歴・現職
団長	廖嘉展	新故郷文教基金会理事長
執行長	顔新珠	新故郷文教基金会執行長
アーティスト		
	張家銘	1969 年南投県埔里鎮生まれ。日本名古屋芸術大学彫刻科卒業。国立暨南大学人類学研究所修士。埔里張家銘芸術センター主宰。
	廖珮如	台北復興美工絵画組卒業。南投県美術学会会員、了無⊠礙画会会員、埔里新生代画会会員、埔里小鎮写生隊員，廖珮如美術教室責任者。
	不舞 . 阿古亞那	1989 台北復興商工美工科卒業。不舞工作坊主宰。阿里山郷来吉部落豊山小学校伝統手工芸教師。阿里山郷来吉部落木彫班講師。部落大学陶芸講師。社区工芸育成計画・ツォ族自然工芸計画主任。原住民駐在芸術家。原住民工芸師優秀工芸認定。
	雅慕伊 yangui	阿里山ツォ族アマチュア芸術家，レストランを開いて長く手料理を作ってきた。およそ 2 年余り前、重大交通事故に遭い、 3 カ月間療養、命の価値に気付いた。その後油絵に出会って、芸術創作にいそしんでいる。
	陳宗勳	1983 年生まれ。国立彰化師範大学卒業、第 12 回 20 号倉庫芸術家。2009 年，場所：20 号倉庫で、展覧会「入境」
記録事務	陳宜貝	新故郷文教基金会デザイン、書籍編集、WEB 編集、社区報デザイン、写真撮影、活動執行等
通訳	王雪雯	翻譯
ボランティア		
	王貞儒	中華民国社区営造学会秘書長、深耕文化工作室主宰者
	廖健棠	王振瑋工作室アート助手〈廖嘉展長男〉
	廖耕樂	紙教堂烘焙室助理〈廖嘉展長女〉
	許仕杰	芸術科系大一新生〈廖珮如男子〉

台湾テレビ取材チーム

張光斗　点燈文化協会　創会理事長
曾慶瑜　レポーター　タレント

その他

黄世輝　雲林科技大学　教授
陳玉蒼　実践大学高雄校区　助理教授
李宜欣　實踐大學休閒產業管理學系助理教授 .
呉儷⊠　台灣藍色東港溪保育協會總幹事

日本・参加者

大槌高校美術部

藤田さくら　岩手県立大槌高校教諭（美術部担当）
岩鼻真那実　岩手県立大槌高校美術部　2 年
小林　咲　岩手県立大槌高校美術部　1 年
中村美里　岩手県立大槌高校美術部　1 年
藤原有那　岩手県立大槌高校美術部　1 年
黒沢奈緒佳　岩手県立大槌高校美術部　1 年
佐々木麻衣　岩手県立大槌高校美術部　1 年
袰岩桃子　岩手県立大槌高校美術部　1 年
三浦晶子　岩手県立大槌高校美術部　1 年

カリタス大槌ベース

古木真理一　大槌ベース長
片岡英和　事務・管理
野田一馬　ボラ活スタッフ
五島三太　同上
生利望美　同上

建物オーナー

道又賢一

報道関係

玉應雅史　河北新報社釜石市局　記者
平野康人　NHK テレビ
鷹見安浩　読売新聞記者

神戸・被災地市民交流会ほか

垂水英司　被災地市民交流会
小林郁雄　被災地市民交流会
神田裕　被災地市民交流会
石井修　被災地市民交流会
天川佳美　被災地市民交流会
福留邦洋　被災地市民交流会
石川永子　人と防災未来センター 主任研究員

神戸大学組

近藤民代　神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 准教授
郷原詩乃　神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 近藤研究室
Titaya Sararit 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 近藤研究室
川上翔　神戸大学工学部建築学科　近藤研究室

青池組

青池憲司　映画監督　制作全体 / 構成
青池雄太　現場演出
山田武典　撮影
村本勝　編集

謝意：碇川豊大槌町長、教育部の皆さんはじめ大槌町関係者には、このプロジェクトに関し、多大なご指導ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

橋仔頭糖廠芸術村と新台湾壁画隊

橋仔頭糖廠芸術村

橋仔頭糖廠は、1901 年日本人が建設した製糖工場で、台湾で最初の現代産業基地である。台湾第 2 の都市高雄市にあり、中心部からは北方へ地下鉄で 30 分の位置にある。第 2 次大戦後は国民政府が接収したが、製糖が衰退してからは、当地は火災に遭うなど次第に放置されていた。1994 年まちづくりの風潮が高まる中、地域文化に関心を持つ人々によって、ここを文化的空間にしようとする動きがでてきた。1998 年台湾で最初の産業遺跡となり、2001 年橋仔頭糖廠芸術村が開設された。その後 10 年余り徐々に保存や整備が続けられているが、なお、整備途上である。現在、芸術村には元の製糖工場の迎賓館を活用した核施設「白屋」や、創作空間としての倉庫、芸術家の滞在施設などが点在しており、さまざまな創作活動や展示などがなされている。

また、芸術村は、行政院文化建設委員会（現在の文化部）が最初の駐村芸術家（アーティストインレジデンス）のモデル実施を行った 7 か所の一つに選ばれた。NGO とアーティスト組織が運営するのはこの芸術村だけであった。

28 ヘクタールに及ぶエリア全体は国営事業台糖会社の所有で、芸術村は使用する部分を賃貸借方式で活用している。芸術村の運営は、「白屋」と「台湾芸術発展協会」が共同で担っている。「白屋」とは 2001 年橋仔頭糖廠芸術村づくりを推進した文化活動者やアーティストで組織するアート会社で、「台湾芸術発展協会」は 2001 年設立された台北の全国的民間文化シンクタンクである。

新台湾壁画隊

芸術村の活動の一つとして 2010 年「新台湾壁画隊」が組織され、これまで次のような活動を行ってきた。

①「蓋白屋プロジェクト」

2010 年 11 月 20 日、1.2 m × 2.4 m のパネル 64 枚壁や屋根で構成された木造の「白屋」を芸術村に建て、台湾全土から 60 名の芸術家が集まって壁画を制作、2011 年 1 月 1 日に完成した。その後、2011 年 7 月台北、9 月雲林、11 月台東など台湾各地で蓋白屋プロジェクトを実施した。

②「コミュニティ創作プロジェクト」

2011 年 3 月高雄白樹里で、6 月屏東佳冬で、実際のコミュニティに入って壁画を描く試みを行った。その後も、台湾各地のコミュニティで住民や当地のアーティストと交流・協働しながら創作活動を行ってきた。

④「国際移動創作プロジェクト」

2012 年は、海外にも活動を広げる計画を進めてきた。今回日本東北で行ったプロジェクトがその第 1 弾で、続いてイタリアでも白屋プロジェクトを実施した。

ペーパードームと新故郷文教基金会

神戸鷹取、ペーパードーム誕生　10 年間復興と共に

1995 年 1 月 17 日，阪神・淡路大震災によって神戸市長田区鷹取にあった鷹取教会（現･たかとり教会）は焼け落ちた。又、教会があった野田北部地区も建物の倒壊や火災で、尊い人命が失われるなど大きな被害を受けた。しかし、すぐさま教会には信者や住民、そして全国から多くのボランティアや団体が集まり、まさに救援活動の拠点となった。その後も、外国籍の住民が多いこの地域で、言葉、文化、民族、国籍などが違う住民と一緒に新しいまちをつくることをめざし、2000 年には NPO 法人たかとりコミュニティセンターが誕生し、現在も敷地内に 8 つの団体がネットワークを組んで、様々な活動を展開している。

震災直後、建築家坂茂は焼け落ちた教会を紙で建てることを提案した。その提案に対し、最初神田神父は「町の復興が先だ」と断ったが、粘る坂氏に「町の集会所としてなら」ということで誕生したのが、ペーパードームである。58 本の紙管の柱にテント張りのユニークなペーパードームは、教会としてだけでなく、復興のための様々な舞台として存分に活用されました。新たな教会の建設が始まるまでの 10 年間、教会やまちの復興とともに歩んできた。

台湾桃米社区　自然・生態をテーマに復興

一方、1995 年 9 月 21 日台湾の中部で地震が発生し、広い範囲に大きな被害が広がった。その被災地の一つに桃米社区がある。台湾の地図のちょうど中心のあたりに位置する、海抜 400 ～ 800 メートルの山村で、369 戸のうち 168 戸が全壊、60 戸が半壊という大きな被害を受けた。若者が都会へ流失するなど以前から衰退傾向にあった桃米は、地震で大きな打撃を受け、村民たちは復興の方向が見いだせず途方にくれた。まちづくりを支援してきた NPO 新故郷文教基金会が支援に入り、住民と話合いをすすｍせる中で、「この地には自然しかない」ことを逆手にとって、蛙、トンボ、植生など豊富な自然生態をテーマに復興村おこしを進めることを決めた。それ以来、村民自身で生態公園を整備し、自ら自然を学習し、そして外から自然を楽しむ人たちを迎えるといった活動を、地域の力量を高めることを基本にした社区営造（まちづくり）方式で進めてきた。現在は、村に民宿も整備され、多くの人たちがこの地を訪れるようになっていた。

ペーパードーム台湾へ旅立つ

台湾の震災の際、神戸からも様々な形で支援に駆けつけましたが、その後も被災地の市民交流活動を続けていた。2005 年 1 月阪神･淡路大震災 10 周年に際し、台湾の復興まちづくり関係者を招いて記念交流活動を開催した。ペーパードームで歓迎会を行ったとき、挨拶に立った台湾代表の廖嘉展さん（新故郷文教基金会董事長）が、突然ペーパードームを台湾へ移設して再生したいという構想を提案した。

最初は半信半疑だったが、次第に台湾と日本の協働プロジェクトとして進めることが決まった。それぞれ実行委員会を作り、教会の信者さんたち、たかとりコミュニティセンター、それから野田北部まちづくりのネットワークなどを通し、全国の大勢の方々から浄財をいただき、無事ペーパードームを解体して神戸港から台湾台中港へ向け､送りだすことができた。そして、突然の申し出から 3 年半、台湾の関係者による粘り強い努力によって､921 大地震の被災地「桃米村」にペーパードームは見事再生した。

桃米に移設・再生されたペーパードームは、周りにいくつかの建物や池、広場などが配され、全体が一つの園区になっている。主な施設は､紙教堂ペーパードームのほか、喫茶や食事、地元の産品の売場などの建物、生態池や芝生広場などが配されている。毎日のように、講座、音楽会、婚礼など各種行事が行われ、多くの人が訪れている。また、村内に 20 軒以上の民宿があり、ゆっくり宿泊することも可能である。